

1 保育における「一人一人が問いをもち追求する姿」

6月初旬、年長児が砂場で水道管や樋をつなげ、そこに水を流していた。そこでは次のように、様々な姿が見られた。水が漏れることに気付き漏れないようにふさぐ、コースをどのようにつなげるかを考える、水の代わりになるものを転がすことを思いつくなどである。このように、「なんだろう」「これは、こうかなあ」等と、子どもが心を動かし、「～したい、～しよう」と「願いをもち遊びを追求する姿」が、保育における「問いをもち追求する姿」であると考えられる。

子どもがある事象に出会ったときに心が動き、遊ぶうちに、「もっとやってみたい」「こんなふうにもしてみたい」と、遊びの回数を重ねたり変化を求めたりするようになっていく。その中で新たな願いが生まれたり、さらに夢中になって遊んだりするのではないだろうか。そこで、保育における「願いをもち遊びを追求する姿」を次のような姿と考えた。

- 気付いたり、考えたり、工夫したり、確かめたりしながら、興味をもったことを続けていく姿
- 目的や課題意識をもって遊びを広げたり深めたりしようとする姿
- 友だちと目的を共有して、考えを出し合ったり互いの考えのよさを受け入れ合ったりしながら共同して実現しようとする姿

2 「願いをもち遊びを追求する姿」を求めて

前述した姿を目指して、以下に示す3点に重点を置く。これらを基に意図をもって保育を構想し、子どもの姿に応じて展開することで、子どもたち一人一人が願いをもち遊びを追求する姿が現れてくると考える。

- 見取りを基にした環境の再構成
- 「自分でみつけた遊び」と「共有する活動」「行事」とのつながり
- 遊びの「広がり」と「深まり」を意識したはたらきかけ

(1) 見取りを基にした変化のある環境の構成

子どもの心が動き、興味・関心をもって、その対象に向かっていく時に、子どもの世界が広がる。そして、見たい、触りたい、自分のものにしたい、などの思いから、夢中になって対象に向かう中で、「なぜそうなるのか」「もっとこうしたい」などの疑問や願いが生ずると考える。願いが強いとき、子どもたちは自ら進んで、疑問を解決しようとし、願いを実現しようとする。このように、保育では、子どもが興味・関心をもって環境に関わるのが、願いをもって遊びを追求することの基盤となっていると考え、大切にしていく。

まず、子どもの興味・関心がどこにあるかを見取り、環境を整える。そして、子どもの反応を見ながら環境を作りなおしていくことで、子どもたちが興味をもつ対象も次第に増えていくであろう。その際、各学年、各期の発達や学びの特徴を捉え、その発達の課題を充たしていくような経験を見極めると共に、子どもがもつ願い、イメージなどを、子どもの言動や表情などから見取り、子どもの必要感に応じた環境を用意していく。

(2) 「自分でみつけた遊び」と「共有する活動」「行事」とのつながり

まずは、「自分でみつけた遊び」をベースとして環境を構成する。そこでの子どもの気付きや疑

問など、教師が意図をもって周りの子どもたちにも伝えたいと思ったことを「共有する活動」で取り上げる。このような「共有する活動」が、友だちと目的を共有することや、共同して願いを実現することにつながると思う。さらに、子どもたちが「自分でみつけた遊び」や「共有する活動」で願いをもって追求してきたことを「行事」に取り入れることによって、子どもたちは新たに課題意識をもち、追求していくこととなるであろう。このように、「自分でみつけた遊び」と「共有する活動」「行事」において、子どもの願いがつながるようにするために、以下の子どもの姿を大切ににする。

① 自分自身の願いをもち、実現しようとしながら遊ぶ

願いをもった子どもは、その実現に向かって遊ぶようになる。繰り返すことによって、少しずつ実現に近付いていく子ども、方法を考えそれを試すことを楽しむ子ども、調べたり友だちのすることを見たりして同じようにしてみる子どもなど、子どもによって道筋は様々である。この様々な道筋を保障し、一人一人の姿に応じて環境を構成していく。

② 友だちと影響し合って遊ぶ

子どもが願いをもち、実現しようとしながら遊ぶために、友だちと影響し合うことが有効であると思う。友だちの様子をよく見て真似したり、友だちと同じことをしようとして自分で工夫したり、友だちと一緒に遊びをつくっていったりすることが、遊びが広がったり新たな願いが生まれたりするきっかけになると考えるからである。そのために、子ども同士の遊びにつながりができるように環境を構成したり、願いを実現しようとしながら意欲的に遊ぶ子どもの姿を共有できるようにしたりしていく。

③ 遊びを振り返る

子どもが遊びながら自分のつくったものをさらにつくりかえる、遊びに合わせてルールを変えながら遊ぶなど、願いをもっているときは、子どもは同時に自らの遊びを振り返りながら遊んでいる。また、片付けをするとき、自分が何をして遊んだかを話すときなど、子どもが自らの遊びを振り返る場面は一日の中にたくさんある。このとき、次の日への期待をもって遊びを終えることが、追求へとつながっていく。そこで、子どもの願いを明確化するために、振り返りを大切にしていく。さらに、願いをもって日々遊んできたことを「行事」へとつなげていくことによって、長いスパンで遊びを追求することにもつながっていく。

以上の点から考えても、「自分でみつけた遊び」と「共有する活動」「行事」との関連を見いだし、子どもの願いがつながるように意識して、保育を構想していきたい。

(3) 遊びの「広がり」と「深まり」を意識したはたらきかけ

子どもが様々な事象に興味をもち、遊びが広がるようなときには、子どもが感じたことを肯定的に受け止め認めたり、共感したりするといった、子どもに寄り添うはたらきかけを中心にしていく。これにより、子どもはさらにのびのびと遊びを広げ、進めていくであろう。

子どもが何かに夢中になり、同じことを何度も繰り返すなど、遊びが深まるようなときには、追求をうながすはたらきかけをしていく。教師も遊びに参加し、遊びが楽しくなるようにしたり、子どもが頑張ってもできないことには必要に応じて手を貸し、子どもの意欲が持続するようにしたりする。さらに、子どもが遊びにおける課題を見付けているときには、それを解決する面白さを体験できるようにしていく。願いを明確化できるような声かけや子どもの考えを掘り下げる質問、課題解決のヒントとなるよう、以前の経験を思い出せるような声かけをすることが有効であると思う。また、新たなめあてになりそうなつぶやきも取り上げる。

これらのような、追求をうながすはたらきかけが、さらなる遊びの継続、追求につながっていくと考える。

(文責 内田 祐)